# 『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第４回】

前回は、「〈偶然〉を〈ただの偶然〉で済ますか、あるいは、〈何か眼に見えない存在が導いてくれたのではないか〉　…、**どちらで捉えるかが信仰の道へ歩み出すか、それとも引き返すかの《分かれ道》**です。あなたはどちらを選びますか？」という、みなさんへの問いかけで終わりました。今回は、みなさんがどちらかを選ぶとき、素晴らしいアドバイスが『新約聖書』にあることから始めましょう。

**《「求めろ、探せ、叩け」》**

**『新約聖書』**の**『マタイによる福音書』**第７章７～11 節には次のように書かれています。

**『求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、もとめる者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者は開かれる。あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。』**

有名な箇所なので、読んだり聞いたりしたことがある方もいらっしゃると思います。**『ケセン（岩手県気仙地方）語訳聖書』**を著した**山浦玄嗣**（やまうら・はるつぐ）氏は、７～８節を次のように訳しています。

**『願って、願って、願い続けろ。そうすれば、手に入る。探して、探して、探し続けろ。そうすれば、見つかる。叩いて、叩いて、叩き続けろ。そうすれば、戸を開けてもらえる。』**

山浦氏は、このように訳した理由を次のように書いています。

**『…、ここをケセン語にしようとしたとき、ちょっと待てよ、とわたしは思いました。自分の人生をふり返ってみても、求めたからといって与えられるとは限らないし、探したからといって必ず見つかるというものではありません。それどころか、求めて得られず、探して見つからないことが多すぎるからこそ、われわれは人生の旅路で苦労しています。イエスのこの約束は、少々安直にすぎるのではないでしょうか。現世の御利益がこんなに簡単に手に入るものとは思われません。』**

この箇所を読んだ私たちがほとんど感じると思われる同じ疑問を、氏も抱いたことを明かします。詳しいことは省略しますが、山浦氏はギリシャ語文法を勉強して、ギリシャ語の命令形には「現在命令」と「アオリスト命令」の二つの種類があることに気づきます。そして、「求めろ・探せ・叩け」という命令は、「現在命令」すなわち〈その動作を継続して実行することを要求する命令形〉であることを理解します。そして『願って、願って、…』、『探して、探して、…』、『叩いて、叩いて、…』という訳文にしたのです。

どうです、共同訳の聖書と比べてください。どちらが私たちのハートに迫ってきますか？　どうも学者先生は「原典」に忠実すぎるのと、自分たちの知的レベルの高さを少しでも誇示しようとして、庶民のレベルを考えないのではないのかな、と思ってしまいます。もちろん、上智大学の夏期講習会の何人かの先生方は例外ですが。

**《祈り》**

祈りは、〈一度あるいは数回〉すれば叶えられるのではなく、何度も何度も繰り返し願うことによって、実を結ぶということです。長い時間が必要なのです。受験生になって、それまで〈七五三〉以外は行ったこともなかった神社にお参りし、「合格祈願」をするような願い方ではないのです。

私は大学受験の年、市内にある有名な「学問の神様」が祭られた神社へ友達に誘われて行きました。結果 ― 見事、落ちました。（この神様の名誉のために申しあげておきますが、落ちたのは、①私がろくに勉強しなかった（浪人中、遠藤氏の小説を読む時間の方が、受験勉強するより多かった！）からであり、また、②我が家は父が俳句をたしなみ、母は小学校の教員（専攻は「国語」）をしていたくらいで、圧倒的に〈文系〉であるにもかかわらず、私が受験科目に「数学」や「物理」、「化学」などの〈理系〉科目がある医学部なんぞ受験した身の程知らずであったからであり、菅原某様には何の責任もないことであります。）

それはともかく、繰り返し心を込めて、願い求め続けるのが私たちの〈祈り〉です。神はそんな私たちの姿を見ておられる ― そして報いてくださる ― というのが神に、あるいは、イエス様に対する私たちの信仰なのです。

**《カトリック教会の祈り》**

カトリック教会の祈りは、ほんとうにたくさんあります。「天におられる私たちの父よ、…」という〈主の祈り〉から、聖母マリアへの祈り……と、何十冊かの本になっているくらいです。

無教会主義のキリスト教がスタートだった私は、ミサで「定められた祈りの言葉」を全員で唱えることに、最初のうちはかすかな抵抗を感じていました。無教会では一人ひとりが、心の中からわき出る言葉を自由に唱えていたので、違和感をおぼえました。しかし、しばらくすると「ミサにあずかるすべての方々が、同じ祈りをいっしょに唱える」ということの素晴らしさに気づきました。ミサにおける定められた信者の祈りは、日本中のカトリック教会で同じ言葉が〈毎日〉・〈１年中〉唱えられるのです。北は北海道、南は沖縄まで！　これって、スゴイことだと思いませんか？　さらに聖人たちが残したさまざまな貴重な祈りもあります。これに一人ひとりの〈その人だけの祈り〉が加わるわけです。この豊かさ！カトリック教会の祈りは、無限と言えます。

《信仰の道》は《祈りの道》です。〈わたし〉のためだけでなく、〈隣人〉のための《祈りの道》でもあります。（このことについては、またいつか…。）

【引用した書籍】

・山浦玄嗣　『ガリラヤのイェシュー』（イー・ピックス出版、2011）　**超おすすめ！**
『イエスの言葉　ケセン語訳』（文春新書 839、2011）　**超おすすめ！**
・日本聖書協会『聖書　新共同訳　旧約聖書続編つき　引照つき』（日本聖書協会、2005）